

運命を変える

園長 児嶋 草次郎

大自然の草木が躍動を始め、野も山も植物たちのエネルギーがほとぼしり満ちあふれて来ています。目にはみえませんが、体内の血や気が呼応しているのがわかります。新しい年度のスタートです。

今月は、「運命を変える」という題で、三つの話を紹介させていただきます。一つは、「高校生自覚旅行」であり、二つ目は、3月18日開催された、財団法人「正幸会」の75周年記念式典における石井記念友愛社としての挨拶（祝辞）。そしてもう一つは、まさに自らの力で運命を変え、今春九州保健福祉大学を卒業したある女性の話。

高校生と職員による2泊3日の研修旅行は、今年は3月31日から4月2日の日程で、四国高知の坂本龍馬を訪れる旅でした。運命を変えるにおいて、一番模範となるのは坂本龍馬の生き方であり、龍馬は、自分の運命を変えるだけではなく、日本の運命をも変えてしまいました。

財団法人正幸会を作ったのは、柿原政一郎氏ですが、私の父虜一郎は、柿原先生によって、運命を変えられ、岡山孤児院の復興としての石井記念友愛社を、昭和20年に立ちあげることができました。

石井記念友愛社は、毎年、九州保健福祉大学の卒業生で、ボランティアや成績において優秀な実績を残した学生1名に、「愛の十次賞」を授与することになっているのですが、なんと友愛社出身のヒダカ・レイノさん（仮称）が大学側から推薦され、私自身の手でその盾を彼女に渡すことができました。

まず、高校生自覚旅行です。先月の「友愛通信」でも触れましたが、リーダーがなかなか育ちにくい状況となって来ています。鹿児島薩摩藩の郷中教育のように、まずリーダーがしっかり自覚してほしいという願いのこもった研修旅行です。3月31日、朝5時29分、友愛社資料館駐車場を明倫観光の小型バスで出発。職員5名、高校生8名（1名はインフルエンザで欠席）。あたりは小雨が降り、まだ夜が明けていませんでした。都農から高速に乗る前に、みんなはコンビニでパンを買って朝食。私は家ですませていましたので、みんなが車内で食べている間に次のように話しました。

この数日の間に何人かが家庭復帰したり専門学校等に進学したり他の施設に移ったりしました。みんなはうらやましく思ったりしたかもしれないけれど、彼等はまだ幸せを手に入れたわけではない。まだ運命をしっかり変えられたわけではない。そこを誤解しないようにしなければならない。運命を変え、幸せを手に入れるための戦いは、まだ何年間か続けなければならない。自己コントロールできなくなって、誘惑に流されれば、人間関係、生活環境は崩壊し、貧困の連鎖と言われるような世界に自分で自分を追い込んでいく。

友愛園の生活は自分の運命を変えるための修行といつも言うけど、運命を変えるという意味において、一番模範とすべきは坂本龍馬です。坂本龍馬は自分の運命を変えるだけではなく、日本の運命まで変えてしまいました。どうしてそれができたのか、学ぶのが今回の自覚旅行の目的です。

いつものように、ひたすら高速道路を北上し、大分県臼杵港からバスごとフェリーに乗って、四国八幡浜に渡りました。臼杵では空はまだどんより曇っていて、肌寒かったのに、八幡浜に着く頃には太陽が輝き、海面もキラキラ光っていました。こちらもソメイヨシノが満開。また高速道（松山自動

車道)に乗って北上し、途中伊予灘サービスエリアで昼食。人出も多く、コロナ禍以前のにぎわいを取り戻しているようにも見えました。瀬戸内海は黄砂でも舞っているのか、かすんでいました。

ちょうど四国のまん中あたり(川之江)から高知自動車道に乗り換え、いくつもの急峻な山々を貫くトンネルをくぐりながら南下し、午後2時半頃、高知で一般道に下りました。坂本龍馬記念館に着く前に、子供たちにより関心を持ってもらうため、また、次のような話をしました。私を含めて職員は数回見学していますが、子供たちは、皆初めての見学。もう一生訪れることもないかもしれません。このチャンスを無駄にしないようにしなければなりません。話す内容は約2時間半の船の中で、龍馬の本を2冊ほど読み返しながら、ある程度まとめておきました。

みんなに配られている今回の旅行のしおり(職員と子供たちが作ったもの)の中に、龍馬は幼い頃「愚童」(ぐどう)であった云々と書いてあります。愚童という言葉の意味は、愚かな子供という意味。5人兄弟の一番下で甘やかされて育ち、泣き虫で寝小便たれだった。その少年が18歳の時に剣道の修行で江戸に出て、その時たまたまあのペリーの黒船来港(1853年)に出くわしてしまった。そしてスイッチが入ってしまう。日本の危機だと察し、それから一所懸命勉強し、勝海舟、長州藩の高杉晋作、薩摩藩の西郷隆盛、それにみんなも一泊旅行で行く熊本藩の横井小楠等に会って直接話を聞き、志や世界観をどんどん大きくしていった。世界を股にかけて商売をしたい(亀山社中)という志も持つようになった。

そして日本の運命も変えることになった。長州と薩摩は当時犬猿の仲だったけれど、両方に行き、リーダーたちに会い、「こんなことをしていたら、欧米の植民地になってしまうぜヨ」みたいなことを言って説明し、薩長同盟を成功させた。そして新国家建設に導いた。今の時代に置き変えるならば、ロシアとウクライナに出かけて行き、「こんなことをしていたら、地球も終わってしまうぜヨ」と説得するようなもの。

「坂本龍馬記念館」見学にあたって、みんなに一つ宿題を出します。龍馬はお姉さんの乙女(おとめ)さん宛に手紙をいくつも出していますが、その中に、「泥の中のすずめ貝のように、常に土を鼻のさきにつけ、砂を頭へかぶり居り候」と書いたものが、記念館のどこかに展示してあります。『自分は田舎の芋サムライだけれども、どんなに泥をかぶっても馬鹿にされても、未来へ向かって前進していくぞ』というような気持ちを表現したものだと思う。この手紙を一番早く発見した者には、賞品をあげます。みんなは高校を卒業し卒園する時には、卒業論文を書くことになる。これからどういう姿勢で世の中に挑戦していくぞという意気込みまで書けるようになるとうい。今までの卒園生で、園に来てからの振り返りはできているけど、未来に向けてどう戦うかまで書けている者はあまりいない。

石井十次少年の「挫折からの立ち直り三原則」についてはみんなにも何度か話したけど、坂本龍馬の「運命を変えるための3原則」を紹介します。これは私がまとめたものです。

- ① 高い志を持つこと。
- ② 出会い。勝海舟や西郷隆盛等に出会ったことで、世界観がどんどん拡大していった。
- ③ プラス思考。龍馬は徹底的な楽観主義者だった。

この記念館は、民間の資金(募金)で作られ県に寄贈されたものだと聞いていますが、観光客向けの展示になっていて、中学生・高校生たちの人生勉強に生かすためには、案内も含めて分かりにくいと感じます。それでも、高2になるセイナが、すぐに「泥の中のすずめ貝」を見つけてくれました。長い手紙の最後の部分に続け字でちょこっと書いてあるだけなのに、よく見つけたものです。

その後、私たちは、桂浜と太平洋を見下す所に立つ巨大な龍馬像を見に行き、その前で記念写真を撮りました。おそらく、この龍馬像は、一生子供たちの心の中に立ち続けることでしょう。前向きに

生きようと思い始めた時、しっかりこの像を目の前に描き直して、私の話を思い出してくれればと思います。

この日の宿は、高知市内の四国霊場 33 番札所雪蹊寺正面に立つ、民宿「高知屋」でした。

4月1日（土）は、8時半頃宿を発ち、「高知城」、「龍馬の生まれたまち記念館」、愛媛県新居浜市の「別子銅山記念館」、今治市の「村上海賊ミュージアム」を巡って、道後温泉に泊まりました。

別子銅山は、住友の経営する鉱山でしたが、高鍋出身の鈴木馬佐也が支配人になった（後に住友の総理事）こともあり、また柿原政一郎氏の父である正一氏が、一時期働いた場所でもあります。石井十次も当時本社があった大阪の事務所に支援のお願いに行っていたことがあります。「別子銅山記念館」を見て、住友という大企業の当時のエネルギーを十分に想像することができました。

石井十次が開拓のため最初に子供たち・職員を宮崎茶臼原に移送したのは、明治 27 年でした。当時は船旅で、4月16日に出発して24日に到着の電報を受け取ったというような記録も残っています。つまりその頃は、小さな船で1週間くらいかけて、瀬戸内海の島々の間を航海しながら岡山から宮崎へ渡ったわけです。遠くから見る瀬戸内海は眠ったように静かですが、当時その航海がいかに危険で大変なものであったかをイメージするのに、「村上海賊ミュージアム」は役に立ちます。潮の満ち引きが激しく、江戸時代は海賊たちの水先案内を必要としたようです。

3日目は朝食後温泉町を散策し、10時頃にバスで出発。またひたすら高速道を走り、フェリーにも一便早いのに乗ることができ、夕方5時前には帰園することができました。充実した3日間となりました。

次に財団法人「正幸会」75周年記念式典での祝辞を、そのまま掲載させていただきます。

我々の法人の生みの親は柿原政一郎先生です。財団法人正幸会と我々石井記念友愛社とは兄弟法人だと思っており、そういう視点で祝辞を述べさせていただきます。

この度は、財団法人正幸会で設立 75 周年おめでとうございます。設立された年は、昭和 22 年であります。日本が敗戦により焼け野が原になって再スタートしたのが昭和 20 年でありますから、それからわずか 2 年後です。

昭和 20 年に、私ども石井記念友愛社は柿原先生のお力によってスタートしております。8月に敗戦し、10月には茶臼原に残っていた岡山孤児院の資産（土地・建物）を使い、私の父児嶋虜一郎を導いてスタートさせております。

おそらく戦前から、柿原政一郎先生は、心の中で岡山孤児院の再生・再興は考えておられたのであろうと思います。敗戦で親を失った多くの子供たちが町をさ迷うことになりました。そのチャンスがやって来たわけであります。ちょうど高鍋で軍隊（岡山連隊）生活を終えることになった私の父をつかまえ、半ば強引に説得し、茶臼原に連れていったのだらうと思います。柿原先生の胸の中で岡山孤児院の解散以来あたためられて来た事業であり、8月敗戦10月開園ですから、それは一気呵成（かせい）に行うことができたのだらうと思います。おかげ様で、現在の石井記念友愛社が存在し、石井十次・岡山孤児院の理念や福祉文化を引き継ぐことができています。

財団法人「正幸会」の設立は、石井記念友愛社設立の2年後、昭和 22 年と申し上げました。おそらく、柿原先生はこれについても、戦前・戦中から心の中で計画していた事業であらうと思います。

柿原先生にとって、戦後を見ずえての最重要課題は二つあったと思います。一つは岡山孤児院の再興です。そして二つ目は故郷高鍋の復興であったのではないのでしょうか。言わばルネッサンスと言ってもよいのかもしれませんが。まず石井記念友愛社をスタートさせ、無事動き出したのを見届けて、次、

財団法人「正幸会」をスタートさせたわけです。柿原先生にとって、企業等を誘致したり会社等を作ること町も町の復興かもしれないけど、もっと大事なことがあると考えられたのだと思うのです。それは、秋月種茂の明倫塾の精神・文化を再生させることです。その頭脳部分として私費で図書館を建設され、町に寄贈されたわけであります。そのため明倫堂の古い文書類はそのまま守られることになり、今も、その発掘作業はボランティアの方々によって地道に進められております。「正幸会」そのものも、着実に地道に活動されています。

石井十次は100年後をイメージできる人物であったと思いますが、柿原先生も100年後を見通しながら事業をされた方だと思います。それから75年という年月が過ぎ去っています。世界的にも重要な歴史の節目に立たされています。我々に柿原先生から与えられた二つの課題、石井十次・岡山孤児院の理念・文化と秋月種茂の明倫塾の精神・文化の復興は、どこまで進んでいるのでしょうか。柿原先生が播いた種がどう成長しているのか、我々関係者と行政は、たえず検証しながら歩みを進めていかねばなりません。

九州保健福祉大学卒業式で「愛の十次賞」を受賞したヒダカレイノさん（仮名）の話です。今まで九州保健福祉大学等に進学した卒園生は、皆、児童相談所を通して来た子供たちばかりです。レイノさんは違いました。障がい者ルートで友愛社のグループホームに入って来たのです。この友愛通信に、今回は本人の手記を掲載させていただいていますので、そちらを読んでほしいのですが、両親離婚後、摂食障害を発症、高校もすぐに退学。精神的にも不安定となり、石井記念友愛社の経営する茶臼原自然芸術館と縁ができました。18歳でした。呼んで話を聞くと、17歳のうちに「高等学校卒業程度認定試験」に合格したと云うではありませんか。葛藤はしているけれども、彼女に「志」を感じ、大学進学をすすめました。みごと「石井十次奨学制度」で「九州保健福祉大学社会福祉学部」に合格。摂食障害は簡単になおる病気ではありませんが、大学の先生方や延岡にある石井記念友愛社の自立援助ホーム「みなこホーム」の職員たちにあたたく支えられながら、卒業することができました。「愛の十次賞」の受賞理由は何か。国家資格「社会福祉士」の全国模試で、なんと全国1位になったというのです。

卒業式（3月19日）、私は必死に涙をこらえながら、彼女に「愛の十次賞」の盾を手渡しました。グループホームに入居して最初に彼女を呼んで話をした時の、ガリガリに痩せた体、挑戦的な目を思い出しながら、人間の運命は変えられるんだと確信し、また、彼女の孤独な戦いを想像しているうちに胸がいっぱいになったのです。まだまだ摂食障がい克服するまでには時間が必要ですが、一人の社会人として、これからもがんばってほしいと強く願います。

紙面が少し残っていますので、自覚旅行中読んだ本2冊の中で、心に残っている言葉をそれぞれ一つずつ掲げさせていただきます。

『志』は進むべき先を明るく照らし、しっかりと導いてくれる。そして『志』が高いほど、困難な目標を前にしてもひるむことなく、『絶対やるぞ』と果敢に挑戦していける。（「運をつかむ」永守重信著）

「偉大なる楽道家は、偉大なる成功者になるということです。つまり、成功者になる鍵は、楽道家になることにあります。（「運命は口ぐせで決まる」佐藤富雄著）。